ＮＯ！リニア

No.５０
２０１２年2月１５日
ＪＲ東海労働組合
リニア反対プロジェクト

残土の処理問題は説明されず！
環境影響評価を論ずることは疑問！

２月８日付『静岡新聞』によると、リニア中央新幹線のトンネル工事（静岡県内）によって排出される残土処理等について、ＪＲ東海から説明されていないことが明らかになりました。そして、県環境影響評価審査会の委員は「現状で環境影響評価を論じることの実効性を疑問視した」としています。リニアに反対していないところから「時期尚早」の声がかかったということです。

静岡県内のトンネルは、南アルプスの真下を貫通する計画です。ここから排出される残土によって、ヒ素などの重金属汚染を心配する地質学者がいます。残土の廃棄場所や工事の場所によっては、重金属が地下水や川に流れ込み、水を飲むことすらできなくなる可能性があります。特に、大井川水系が汚染の危機にさらされます。

残土処理の計画がない中で工事を進めるということは、放射性核廃棄物の処理の目処も立たない中で原発を運転するのと同じです。ＪＲ東海は、地域住民に説明をキチンとするべきです。

ＪＲ東海労は、傲慢・強引に進めるリニア中央新幹線建設に反対していきます。

生態系への不安はそのままだ！

大量残土 影響見通せず

自然保護と両立焦点

リニア県内区間

リニア中央新幹線建設計画で大量の発生が見込まれることが7日分かった南アルプス地下の長大トンネルの建設残土。貴重な生態系が残る南アルプスの自然保護と、公共性の高い大型インフラ整備をいかに両立させるかは「大きな課題になる」というのが、関係者の共通した見方だ。

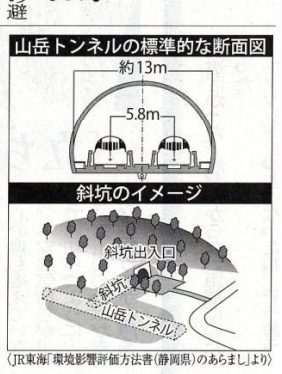
山梨、静岡、長野の3県を貫く長大トンネルは、東京―名古屋の全線の中でも難工事区間と指摘されている。

県内区間では斜坑を掘り進めた上で、本坑掘削に入る特殊な工法が見込まれる。

斜坑は、地表部からさず、リニア開通後に地下の本坑の通過地点に至る建設作業用のトンネルとして掘る。ＪＲ東海は斜坑を埋め戻換気施設や緊急時の避難路として活用する考えを示している。

ＪＲ東海の環境影響評価（環境アセスメント）方法書はトンネル位置を幅3㌔で大まかに示すにとどまる。

斜坑の位置や工事用道路、残土処理場などについても具体的な説明がなく、県環境影響評価審査会で委員は、現状で環境影響評価を論じることの実効性を疑問視した。残土の規模が明確になれば、土砂の具体的搬出方法や、それに伴う環境影響評価の在り方などが焦点になるとみられる。審査会長の和田秀樹静岡大教授は「自然の生態系は、われわれが何も分かっていないと思う方がいいぐらい複雑なもの。（リニア建設の）影響が少ない方法を知恵を出して考えなければならない」と話している。



〈JR東海「環境影響評価方法書（静岡県）のあらまし」より〉